国際漁業学会（JIFRS）短信

<https://www.jifrs.info/>

事務局 E-mail: jifrs.kaiyodai@gmail.com

郵便振替口座番号：00100-6-26448 国際漁業学会

振込：ゆうちょ銀行 店番 019 当座 店名〇一九店 口座番号 0026448

2022 年度第 2 号

2023 年 1 月 18 日刊

目次

1. 会長あいさつ「コロナ禍を乗り越えて」	婁 小波
2. 2022 年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告(1)	村井彩子
3. 2022 年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告(2)	金澤拓海
4. 2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）予告	李 銀姫・松井隆宏
5. 事務局便り	中原尚知

1. 会長挨拶「コロナ禍を乗り越えて」

婁 小波（国際漁業学会会長・東京海洋大学）

このたび、皆様のご推挙により再度国際漁業学会会長を仰せつかることとなりました。会員の皆様のご信任に感謝申し上げるとともに、ウィズコロナという混迷の時代を迎えた今日において、学会がその社会的使命をよりよく果たしていくための責任の重さを改めて痛感しているところです。

2020年2月に新型コロナウイルス感染症の発生がはじめて確認されてから、日本では感染の拡大と収束を繰り返しながら、現在第8波の真只中にあります。コロナ禍は社会のありとあらゆる分野に影響を及ぼし、これまでにわれわれが当たり前のように送ってきました日常が一瞬のうちに崩れ去ってしまい、代わって長きにわたる耐乏生活を強いられるようになりました。

改めて申し上げるまでもありませんが、学会は国内外の学生、業界、行政、さらには研究者や研究に関心を持つありとあらゆる方々の学术交流の場、情報交換・意見交換の場、さらにはネットワークづくりや親睦を深める場として機能するコミュニティであり、その正常な活動が研究の活性化や科学技術の進歩に寄与し、若い研究者の育成にも寄与することが期待されています。学会はそうした役割を果たすために、さまざまな活動を展開するわけですが、なかでもとくに学会誌の発行、情報の発信、さらには研究会の開催や大会の開催が重要であることはいまでもありません。ところが、コロナ禍はこうした学会が当たり前のように行ってきたことを、当たり前のようになくしてしまい、本学会でも対面での大会開催を見

送らざるを得なくなりました。

この厳しい情勢下にあつて、幸いなことに、本学会ではこの三年間に大会主催校（関西学院大学、東京海洋大学）の関係諸先生や事務局のご尽力により、多くの会員のご参加を得て、オンライン方式で全国大会を開催することができました。膝を突き合わせた議論や親交を深める懇親会の楽しみはなくなりましたが、会員の皆様方の日頃の研究成果を発表する場を確保できたことで、学会活動を何とか継続することができ、学会の歩みを止めることなく継続することができました。この場をお借りして、大会への参加、研究発表へのエントリー、オンラインでの議論への参加など、非常事態下での学会の活発な活動とスムーズな運営にご尽力くださった会員の皆様方、関係者の皆様方に改めて御礼申し上げます。とはいえ、コロナ禍は肝心のわれわれの研究活動に、やはり大きな制約を課してきました。

これまでの入国規制や水際対策の強化、県境を越えた移動の自粛、さらには大学などの研究機関の厳しい入構措置の徹底などを受けて、本学会メンバーがもっとも得意とし、研究の肝ともいべき海外へのフィールド調査や、地域でのヒアリング調査などの社会調査が厳しい制約を受けるようになりました。社会科学にとって、実社会における人々のビヘイビアや企業の経営や組織・地域の構造やそれらの戦略的行為に関するデータの収集・解析・記述・説明を行うための社会調査の重要性は改めて指摘するまでもありません。アンケートやインタビュー、参与観察やケーススタディなどによって、はじめて社会経済の現状を的確に把握し、その変化にかかわる諸事象を正確に抽出することが可能となります。そして、そうした努力によって、はじめてさまざまな社会課題を解決するための効果的な政策を提案するための科学的エビデンスを提供しうるわけです。経済のグローバル化とブロック化が進み、複雑化しつつある今日において、社会事象への深い洞察と社会課題の解決に貢献する社会科学にとって、社会調査の制約は深刻な事態だといわざるをえません。

また、さまざまな研究会やゼミ、意見交換会の対面実施もできなくなり、研究仲間や業界・行政の方々との緊密なコミュニケーションをとることや情報交換もできなくなりました。有意義な研究テーマの設定・選定や、課題解決のためのアイデアや研究のひらめきは思索のみでなく、時として有益な議論から得られることは経験則として知られています。コロナ禍によって、「知」を生み出すさまざまな空間が大きく狭められてしまっています。

さらには大学院生をはじめとする若手研究者同士の関係性の構築がきわめて難しい状況下におかれるようになりました。若手後継者の育成という点においては、社会調査の技法を習熟する機会も大きく制限されています。コロナ禍がさまざまな形でわれわれの活動を分断してきたわけです。

ポストコロナとしての「ニューノーマル」な世界がやってくるかどうか予測し難く、当面はウィズコロナの時代を迎えざるをえません。新型コロナウィルスとの共生が求められる今、学会がその歩みを止めることなく、ひきつづき社会の負託にこたえていくのに、改めて問われるのは、そうした分断や制約をどのようにいち早く解消し、研究活動を正常に回復させるかだと思えます。会員同士の交流プラットフォームであり、コミュニティでもある本学会が、今後よりよくその機能を発揮するためには、分断の回復と活動の正常化により目を向けて取り組んでいくことが重要だと考えています。

学会活動の正常化・活発化に会員の皆様方の一層のご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

2. 2022 年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告(1)

村井彩子（農林水産政策研究所コンサルティングフェロー）

2022 年 8 月 27 日から 28 日の 2 日間にかけて、2022 年度国際漁業学会年次大会が WEB 形式にて開催されました。去年に引き続き、新型コロナウイルス感染症の蔓延により制約が多い中での開催となりましたが、事務局の皆様方大変な努力により滞りなく開催されました。今回の大会につきまして、報告を書かせていただく機会を承りましたので、概要を以下のとおり報告いたします。

大会 1 日目ではシンポジウムが開催され、本大会のテーマである「水産の成長産業化を支える新たな仕組み」について東京海洋大学の婁先生より解題の講演をしていただき、テーマを構成する各論に沿ってそれぞれ報告がなされました。

解題においては、水産業においても成長産業化が強く求められるようになったことを受け、本シンポジウムにおいては水産業の成長産業化を支える新たな社会的仕組みとして、①漁業の生産性の評価、②水産物流通システムとしての電子商取引、及び③世界のフードシステムと接続を図るためのエコラベル認証制度に焦点が当てられることが説明されました。

解題を受けまして、4 つの各論による報告と 2 名のコメンテーターによるコメントが行われました。各論の最初に「漁業の生産性評価をめぐる諸課題」と題して農林水産政策研究所コンサルティングフェローで水産庁職員の木村様からご報告をいただきました。報告においては、水産政策改革の経緯のほか、他の産業や政策で用いられている評価手法や指標についての整理や漁業分野に当てはめた場合の課題について分析されました。漁船漁業は経営形態が多岐にわたっているため、要素的な部分では他産業等からの借用が可能なのかもしれませんが、報告にもありましたように実際においては実態に沿った指標の選出・評価方法の構築が必要だと思いました。

次に、同じく現役の水産庁職員であり東京海洋大学大学院生の福釜様らから、「漁業経営の財務・生産性・効率性分析の研究動向」と題して国内外における漁業効率性の研究動向や、ギンザケ養殖を対象とした生産性分析について報告いただきました。海外では漁業の生産性分析が多数行われている一方、わが国では機器導入や兼業等による効果等の分析は多く行われているものの、経営診断等に関する研究事例は限られていると指摘し、わが国における漁業の効率性分析に関する研究分野の進展の可能性をつよく感じました。また、包絡分析法やフロンティア分析について国内研究の事例紹介があったほか、「がんばる養殖復興支援事業」にて行われたギンザケ養殖について DEA を試行した結果についても報告をしていただき、今後の当該分野における研究について重要な示唆が示されました。

3 番目に、東京海洋大学中原先生より「水産物流通システムと電子商取引」と題して流通システムの観点から電子商取引（E-commerce, EC）の普及実態や普及可能性について論じていただきました。EC の導入によって商取引の省コスト化や商圏の拡大といった効果が期待されているものの、水産物は一般的に商品としての規格性が低いため、そういった効果は限定的ではないかとの見解が示されました。また、消費地市場や産地市場における EC の導入実態の定性・定量的な調査結果が示されたほか、全漁連「ギョギョいち」のようなプラットフォームを利用することで可能性が論じられました。水産物 EC の参入事例は増えていると思われるものの、中原先生が

ご指摘されましたように、実際の流通においてはあくまでサブストリームに留まるのかなという印象を持ちました。しかし、一部においては先端情報技術を用いた野心的な試みも見られますし、猪俣先生にもコメント頂いたようなビッグデータの活用なども考えられることから、ICTを用いた水産物流通技術の飛躍の余地はまだあるものかと思われます。

4番目に、東京海洋大学の大石先生から「世界のフードシステムとの接続—エコラベルの諸問題—」世界のフードシステムに接続するための水産物エコラベルについて、役割や課題について論じていただきました。わが国においても国内独自のエコラベル（MEL）が国際基準を満たしたスキームとして導入されているものの、それらを十分に活用できていないことについて問題提起いただきました。現時点においてエコラベルが商品の購入促進につながらないとしても、世界における水産物消費量の増加に伴い食品安全性や漁業の持続性に関する要請は高まっており、日本にも対応を迫られることにならうかと思われます。それゆえ、大石先生より発表中にお示し頂いたような国際標準化をビジネスにつなげる考えを現場にいかに関与するか、それを学術分野からどう提案できるかが今後の課題になるかと思われました。

シンポジウムの一連の発表が終わった後、下関水産大学校の猪俣先生及び農林水産政策研究所の若松先生からの的確かつ示唆に富んだコメントをいただき、ディスカッションにおいては参加者も交えてそれぞれの発表者と活発な質疑応答や議論が行われました。最後に、大会委員長長の宮田先生より閉会のご挨拶をいただき、本シンポジウムは盛会裏のうちに終了いたしました。

2日目は個別報告プログラムが開催されました。はじめに特別セッションが開催され、妻先生より「世界の水産物貿易と日本の輸出戦略」と題した趣旨説明の講演をいただきました。

その後の報告において、最初に東京海洋大学若松先生より日本水産物の輸出競争力について、統計データを用いた競争力の要因に関する分析についてお話いただきました。次に、上海大学の李先生より、中国における水産物貿易の展開や構造変化について示していただき、今後の貿易発展を促す対策について指摘いただきました。また、農林水産政策研究所の高橋様からはわが国のホタテ輸出の構造変化とその要因について、可食部である身だけでなく殻の需要に着目した考察をお話いただきました。同じ農林水産政策研究所の久保田様からは水産加工機械に着目し、多くの統計データや聞き取りの結果を整理された上で、今後の課題検討を示していただきました。最後に、東京海洋大学原田先生からは、輸出振興の政策についてお話いただき、愛媛県で行われている輸出振興策について詳細なご報告をいただきました。

その後、オンライン上で2会場に分かれ、様々なテーマで報告が行われました。スケジュールの関係上、拝聴できなかった発表もありましたが、本学会大会にてたくさんの方々による発表や議論が行われたことについて大変喜ばしく思われました。また、私の発表についても多くの方に聴いていただけたことは、今後の私の活動に大きな励みとなりました。すべての個別報告が終了した後は総会が開催され、本学会大会のプログラムはすべて無事に終了しました。

今回の学会大会においても多様なバックグラウンドの方々にご登壇いただき、生の声で議論がさかんに行われたことにより、文献には無い学びや気づきが多く得られたと思われています。また、私のような学外かつ若輩の者にも、発表や質疑を通じてベテランの先生方とやりとりができる機会を頂けたことは大変ありがたく存じます。

最後になりましたが、本学会の準備にご尽力いただいた事務局の皆様にも多大な感謝を申し上げます。

3. 2022年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告(2)

金澤拓海（東京海洋大学大学院博士前期課程）

2022年8月27日から8月28日の2日間で国際漁業学会 2022年度大会が開催されました。今年の大会もオンライン開催となり、27日は13時からシンポジウムが行われ、4人の先生方が講演されました。28日は9時から個別報告が行われました。

シンポジウムでは、「水産の成長産業化を支える新たな仕組み」をテーマに報告が行われました。水産業の成長産業化の議論が活発化している中、本テーマは非常に重要なテーマだと感じました。講演に先立ち、婁小波先生が日本の水産業の生産性に関する現状を総括されました。

最初の報告者として登壇された木村聡史先生は、漁業の生産性の指標について様々な切り口から紹介されました。生産性の指標は一つではないこと、さらに漁業は他産業とは異なる点があり、それらを踏まえてどの指標を採用するか判断する必要があることを指摘されました。生産性に多くの指標があることを意識したことは無かったため、勉強になりました。

2人目の報告者として登壇された福釜知佳先生は、漁業における財務分析および漁業経営の生産性・効率性の海外・国内の研究事例を紹介され、日本における研究事例が少ないことを指摘されました。そのうえで、「がんばる養殖復興支援事業」におけるギンザケ養殖業のデータを対象にした分析を報告されました。私は養殖業の経営安定化に関する研究を行っておりますが、今まで生産性については研究の中で議論してこなかったため、新たな視点を得ることができました。

3人目の報告者として登壇された中原尚知先生は、水産物流通システムにおける電子商取引（EC）の現状や課題、展望について報告されました。ご報告の中でも、水産物では未だにECは未発達であることを示すデータや漁協におけるEC導入率と各種指標との関連性についての分析が興味深かったです。

4人目の報告者として登壇された大石太郎先生は、輸出拡大のためのツールとして注目されているエコラベルについて、現状や課題を解説されました。日本では海外で主流のMSC認証の取得事例はわずかで、日本発のエコラベルであり海外では主流でないMEL認証の取得事例が多いことから、MSC認証が要求されない国々への輸出強化などの必要性を指摘されました。さらに、エコラベルの国際標準化の問題点を指摘されました。エコラベルの現状やエコラベルの問題点について知ることができました。

4人の先生方のご報告の後のコメントでは、猪又秀夫先生、若松宏樹先生からのコメント・質疑が行われました。その後、ディスカッションの時間で質疑応答が行われました。コメントやディスカッションでは深いご見識のもとコメントやご質問が行われ、私はそれに刺激を受け、深い知識を身につけていきたいと感じました。

2日目の個別報告では最初に「世界の水産物貿易と日本の輸出戦略」をテーマとした特別セッションが開催され、5人の先生方が報告されました。その後は第1会場と第2会場に分かれ、各々のテーマで報告が行われました。私は第1会場に割り当てられ、報告者として登壇し、ご質問もいただくことができました。いただいたご質問で得ることができた視点を研究に活かしていきたいです。また、研究内容を発表してご評価いただくことの重要性を改めて認識することができました。ご質問いただいた先生方に心より感謝いたします。

以上、大会についてご報告いたしました。オンライン開催となりましたが、非常に有意義な 2 日間で、新たな視点を得ることができました。国際漁業学会 2022 年度大会の開催・進行に尽力して下さった方々、そして参加された全ての方々に深く感謝申し上げます。

4. 2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）予告

李 銀姫大会開催校代表・松井隆宏大会運営委員長

2023 年度大会は下記の通り東海大学静岡キャンパスにて行うことになりました。今のところ、対面での実施を予定しております。多くの会員、関係者の皆様からのご参加をお待ちしております。

記

会 場：東海大学 静岡キャンパス

〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸 3-2 0-1

日 時：2023 年（令和 5 年）8 月 26 日（土）～27 日（日）

日 程：8 月 26 日 午前：各種委員会・理事会

午後 シンポジウム（漁村地域振興と海業に関するテーマを予定）

夜 懇親会

8 月 27 日 午前：個別報告（申し込み数が多ければ午後も）

午後 総会等

参加費：一般会員 1,000 円

一般非会員 2,000 円

ただし、地元漁業関係者や学生は無料

5. 事務局便り

中原 尚知 （国際漁業学会事務局・東京海洋大学）

1. 2022 年度 国際賞、国内賞について

2022 年度の国際賞 (JIFRS YAMAMOTO AWARD) は IIFET 2022 での研究報告“A Game Theoretic Model and Solution for the Malindi Ungwana Bay Penaeid”が評価された Moses Wambua 氏に授与されました。国内賞（功績賞）は多田稔氏（近畿大学）、国内賞（奨励賞）は大石太郎氏（東京海洋大学）、神山龍太郎氏（水産研究・教育機構 水産資源研究所）、山田二久次氏（三重大学）に授与されました。学会賞には推薦がありませんでした。次年度も多

数の推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2. 今後の大会シンポジウムテーマ等について

今後の大会シンポジウムテーマや個別報告の「特別セッション」などにつきまして、企画提案を募っておりますので、ご提案や企画などがございましたら、事務局までご一報いただけますと幸いです。

3. 会費や大会参加費の納入について

2020年より会費等の納入先が変更になっています。本短信の冒頭に記した情報をご確認のうえ納入をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

本年度より新体制となっております。今後とも、よろしくお願いいたします。